

僕が紡ぐ彼女の物語

ネギサーモン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕の友人は小説家であり喰種だ。
そんな彼女と僕の話。

*処女作なので読みにくいかもしれないです

*オரி主とエトさんの話です。若干原作と話が異なります。

目次

第一話	1
第二話	7
第三話	14

第一話

―― 僕には命を賭しても守りたいものがある。世界の誰もが見なくても、彼女を守る為ならばどんな犠牲も払おう。例えこの身が減びようとも、世界が減びようとも。そう思えるほどに彼女は残酷で最悪でそして美しかった。

これから紡ぐ物語は僕と彼女の何気ない日常であり、僕が彼女を救う物語である。

.....

彼女との出会いは僕が高校生の頃であり、彼女が作家としてデビューをした少しあとの時だった。あの時の事を今でも鮮明に覚えている。あれは、桜が見頃を迎え空が絵に書いたような青色で僕が高校2年生になってから1週間ほどした時のことだ。

まず始めに僕の家庭環境から説明をしなければならぬ。僕の両親は既にこの世にはいないらしい。小さい頃の記憶なのでよく覚えていないが、どうやら僕を置いて家から出ていきそのまま行方不明のままのようだ。両親が居ないと知った時に普通ならばどう思うのだろうか。悲しいだとか寂しいだとかマイナスな気持ちになるのが普通だろう。けれども僕はそうではなかった。僕は両親が居ないことを悲しいとも寂しいとも思わなかった。と言うよりは、思わなくなつたと言う方が適切だろうか。まるで海に投げ込まれた小石が作った波紋のように僕の心から両親に対しての感情は消えていった。

両親がいない僕を育ててくれたのは父の親戚にあたる人物であった。彼の住む家は綺麗な日本家屋だった。そして、彼もそこに住むであろうに相応しい髭を生やした着流しがよく似合うおじさんであった。(おじさんと呼ぶと怒られるのでおじさんはここだけの表現である)

彼は身寄りのない僕を養子として大事に育ててくれた。一般的な教養を学び、武道として柔道や剣道を始めとした様々な事を学ばせて

くれた。特に僕が興味を持ったのは読書であり、この家の書齋には本が見渡す限りに並んでいたのだから飽きることもなく読書に耽っていた。どうやら彼は作家として成功したらしく、その時の印税でこの家を建てて現在も生活をしているらしい。(この話をしてくれた時はおじさんがだいぶ酒に酔っていたので真偽の程は定かである)

一人でいることが多かった僕にとって本は友達のような存在であった。ミステリー、時代劇、かつての文豪たちが紡いできた言葉を噛み締めるかのように僕は吸収していった。本を読めば読むほど、本を読みたくなる。人間の成長はいつかは止まり退化が始まるらしいが、本は進化も退化もしない不変なのである。本がボロボロになることがあっても彼らの言葉は変わらない、僕達人間が変わっていても本は変わらず存在するのだ。なぜだろうか当時の僕には本が面白くもあり怖いと感じていた。人は変わり続けるのに人が作り上げたものが変わらないなんて、まるで僕達を監視し続けていて貴方は変わらぬ私達を必要としてくれる？そう訴えているように感じてしまった。

このようにして、僕は本が好きであり怖くもあった。本が変わらないように僕のこの生活も変わらないと当時の僕は思っていた。そんなことは無いのに。

.....

おじさんが倒れた。学校で3限目の日本史を受けている最中であつた。その時学んでいたのは第二次世界大戦で日本がどうして太平洋戦争を開戦したかを知り、原爆によって戦争が終了したことを学んだ時であつた。僕の心は深く傷ついた。両親がいなくなつてからの10年ほどを育ててくれた大好きなおじさんが死んでしまうのでは無いかと頭に過ぎったからである。僕は先生と一緒にタクシーに乗り込み近くの市民病院に向かった。

幸いにも命に別状はなかつたようで、僕が病室に入るとおじさんは

笑いながら僕の頭を撫でてくれた。この時の感覚は死ぬまで忘れな
いだろう。最初は気づかなかったが僕は柄にもなく目から大きな雫
を零していたようだ。そんな僕を見ておじさんは口を開ける。この
時におじさんが紡いだ言葉を僕は一生忘れず、そして背負ったまま生
きていくことになる。

「どんなに好きな人でもいつかは死んでしまう。死は皆平等に訪れ
るものだ。けれども、誰かがその平等性を崩し不条理が襲うことがあ
る。それは俗に言う殺人である。殺人にも様々な動機がある。家族
が殺されたから、金品が欲しかった、他にも色々あるが一番許しては
ならないのはただ殺したかったからという理由だ。理由があれば人
を殺して良い訳では無いが意味もなく人を殺すことはあつてはなら
ない。お前は聡いからこの意味がわかるだろう?」

おじさんは僕に勉強を教える時のように丁寧に真面目に語りかけ
てくる。僕はおじさんが言いたいことが理解出来ていると思ってい
た。そんなことを見越しているのだろうか、続いておじさんは言葉を
続ける

「俺が死んでもお前は悲しまなくていい。お前が悲しむ姿は見たく
ないし俺が死ぬのは必然だからな。それに女房を失ってから俺の生
活は色彩を失ったように枯れていた。けれども、風の噂でお前の話を
聞いた時に心のどこかでお前を助けてあげたいと思ったんだ、これが
俺の最後の仕事のように俺は感じたよ。お前との生活を文字にして
本にすることで、胸に溜まった泥が吐き出されるように思ったんだ。
始めは愛想がなかったお前も歳を重ねる事に笑うようになってきた。
今でもたまにしか笑わないけどな・・・俺はそういう人間らしさが好
きで作家という仕事をしていたんだ。出会いがあり、別れもあるこれ
が人生の楽しさであり辛いところだな。」

この後もおじさんの話は続いていく、ここに来るまでは空の色が青
1色だったが今では淡いオレンジ色が僕らを照らすかのように窓か
ら射し込んでいた。

「話が長くて悪かったな。まあ結局のところ俺が死んでも気にす

るなつてことだな。それと、もしも自分が心から愛していると思える相手がお前にできたのなら何があつても支えてやれ、そして助けてやれ。俺にはそれが出来なかつたが、お前なら出来るはずだ、何せお前は俺の自慢の息子だからな。」

おじさんはそう言葉を紡ぐと高笑いをして眠つていった。この後おじさんが目を覚ますことは無かつた。これがおじさんと僕の最後の会話であり記憶に残る限り最後の涙であつた。

後で聞いた話だが、どうやら僕の担任はおじさんが危ない状態であることを知っていたようだ。おじさんは意識を取り戻してから医者を通じてか説得して僕との最後の時間を作ってくれたらしい。そして、学校に連絡をして僕とおじさんの最後の時間を見守っていたようだ。医者から、君宛のだと言われ手のひらに乗る四角い箱を渡された。箱を開けてみると入っていたのは指輪のネックレスだつた。指輪に刻まれた数字とイニシャルから察するにおじさんが結婚した時の結婚指輪であることはすぐに理解できた。おじさんがなぜ僕に渡したのかは分からないが僕はその指輪を肌身離さずに付けるようになった。

その後、病院で様々な手続きを終える頃には日が完全に沈んでいた。病院から家に帰る時に僕の担任はタクシーで送つていくと言つていたが僕はそれを断つた。病院から家までは15分ほどだし、今は無性に1人になって風を感じたかつた。タクシーが去つていくのを見送つてから街灯の光に導かれるように家を目指して歩いていく。これが僕の運命の出会いに繋がるのだ。

.....

夜はまだ冷えるな。昨日の天気予報では花見日和というほどに昼間は暖かかつたが、夜は風が強く雲が月の光を遮るように浮かんでいる。急いでいるとはいえ、学校にブレザーを置いていったのは失敗だつたかもしれない。しかし後悔をしたところで何も変わらない。

自販機で暖かい飲み物でも飲みたいな、できればコーヒーのブラツクを。確かもう少し行った場所に暖かい飲み物がまだ売っている自販機があつたはずだ。その自販機がある場所は街灯が少なく、帰り道でもなければ通りたくもない道だったが、背に腹はかえられない。僕はその自販機を目指して足を動かした。

やはりコーヒーはブラックに限るな。コーヒーを啜りながら満足した僕は、つい曲がる角を1個早く曲がってしまった。まあ別に次の角を右に曲がれば変わらないだろうと思っていたが、どうやらこの道は行き止まりのようだ。はあ元に戻るしかないか。そう思つて踵を返そうとしたが、僕の足は動かなかった。というよりも動かせなかったのだ。行き止まりの壁に血塗れの女の子が倒れているではないか。見た感じ中学生ぐらいだろうか、壁に寄りかかっているからだろうか。身長は150cmくらいで肩にかかるくらいのショートヘアと小さな童顔はより幼さを引き立たせた。

警察を呼ぶのが先だろうか、それとも救急車だろうか、そう考えながら電話をしようとポケットに手をつ突つ込むが自身の太ももに触れる感触がしない。そういえば、今日はブレザーのポケットに携帯を入れていたんだつた。まずいな、このまま彼女を置いて近くの家に行くのが得策だろうか。とりあえず、彼女が生きていることだけを確認しようとして彼女へと歩を進めていく。

どうやら意識はあるようだ。意識があるのならこのまま近所の家に警察と救急車を頼みに行ける。そう思い彼女の傍を離れようとするが、僕のシャツの袖を小さな手が掴んでいた。どうやら彼女が目を見ましたようだ。

「大丈夫ですか？今から警察と救急車を呼んでもらうように頼みに行くので待つててくださいね」

そう言い彼女の手を袖から離そうとするがなかなか離れない。このままでは彼女が出血して死んでしまうではないか。そう思い無理矢理に彼女の手を引き剥がし立ち上がると今度は彼女の声が聞こえた。

「警察と救急車は呼ばなくていい。代わりにだが……」

警察と救急車はの呼ばなくていい？彼女はなぜそんなことを言ったのかは分からなかった。だが、今は彼女の言葉を聞こうではないか。

「代わりに何をすればいいんだ？」

僕の質問に答える、よりかは零れるような小さな声で彼女は呟いた。

「代わりに私に君の血を飲ませてくれ」

この女は何を言っているのだろうか。僕はこんな状況だが彼女の目を見て冷静になった。彼女の右目は黒曜石のように黒く、ルビーのように赤かったのだ。僕は彼女の正体に確信を持った。この見た目そして、警察も救急車も求めず血を求める。そんな存在この世の中にひとつしか存在しないだろう。

——彼女は喰種だ……。

これが僕と彼女の運命的な出会いだった。

第二話

「……さて、一体どうしたものでしょうか。」

目の前には血塗れの女、それもただの人間ではなく喰種である。普通に考えるのであればCCGに連絡をして彼女を引き取ってもらわなければならないだろう。しかしながら、僕はそうはしないだろう。僕は彼女に興味を惹かれた。一目惚れに近いのだろう、何故だか僕の心は彼女に夢中になっていた。

「君は喰種なのか？」

「そうだとも、私は喰種だよ。見ての通り瀕死の重体だけれどもね。」

僕の質問に彼女はあっけらかんと答える。隠すことも無く、逆に喰種で悪いのかとも言えるほどに素直で真つ直ぐな言葉だった。

「僕はどれぐらいの血を君に飲ませればいいんだ」

「ふむ。まさか喰種に血を与える人間がいるとはね。少年、君は中々の変わり者に違いない」

僕が彼女に血をあげようと言っているのに、なぜだかバカにされた気分である。それになぜ死にかけているのにそんなにも生き生きとしていられるのだろうか。彼女は死が怖くないのだろうか。

「君は死ぬのが怖くないのか？」

「もちろん死にたくないさ。まだ私にはやらなければならないことがあるからね。」

「どうやら彼女にはやらなければならないことがあるらしい。続けて彼女は言葉を紡ぐ」

「なにやるべきことがあってもだ、所詮いつかは私は死ぬんだ。それが今か、それとも1週間後か1年後か。そんなもの誰も知らない。君が此処を通らなければ、私は君に会うことも無かっただろう。この世界は歪んでいるからね。だからこそ、こういう巡り合わせを楽しみたいと私は思うよ。」

彼女は難しいことを言う。似たようなことをおじさんからも聞いたことがある気がする。確か人と人との繋がりは大事にした方がいい

いと、その出会いが自分の人生の分岐点になるやもしれない。だったかな、ならば彼女との出会いも運命なのかもしれないな。

「そうだった君の質問に答えねばならなかったな。血の量はそんなに要らないよ。体の修復は君との会話の最中に粗方済んだし、君が持っている缶コーヒートの1/4くらいあれば嬉しいかな。」

缶コーヒートの1/4とはまた随分な量である。確かに体重の1/12を失わなければ人は死なないだろうが、それでも献血すらしたことがない僕からすれば大層な量に感じる。

「別にかまわないが、僕はどうやって血を出せばいいんだ？ペンやハサミがあれば良かったが、生憎と所持品は財布とタオルくらいしかないんだ。」

「学生ともあろうに筆記用具を持っていないのかね？もつと勉強に励むべきだぞ少年」

「今日は少し用事があったって学校を早退したから荷物は全部学校にあるんだ。それに心配されずとも勉強だって学校では常に1位を取れているよ。」

「ほうほう。どうやら君は中々の頭脳をお持ちのようだからクイズでもしようじゃないか。」

「クイズって別に僕はかまわないが、そんなに余裕があるのか？」

僕は彼女に疑問を投げかける。

「平気平気。立てないだけだし、退屈は嫌いなんだよ。それではクイズタイム!!少年はこれからどうやって血を流すでしょうか？さあさあ答えてくれたまえ」

1分ほど思考を試みたが、どう考えても僕にはこの問題の答えを導くことができない。

「どうやって。この状況じゃそれがわからないから君に質問したんだろう。」

「時間切れだよ少年。正解は私の赫子によってでしたく不正解者には罰ゲームが必要だ・・・だからその左腕貰うね」

左腕が熱くなっていくのを感じる。それに少女の腰から紅色の樹

木のような物が伸びている。なんだよ、そのクイズ正解できるやつが世界に何人いるんだよ。悪態をつくが今更遅い。どうやら、僕はここで死ぬを甘く見ていたらしい。だんだん眠くなってきた。僕はここで死ぬのだろうか。だが彼女に殺されるのなら悪くない気がした。視界が狭くなる、このままおじさんに会えるのだろうか。結局おじさんの約束は果たせなかったな……

そして僕の視界は暗転した。

.....

目を覚ますといつもの天井だった。どうやら僕は自分の部屋にいるらしい。畳の上に引かれた布団の上で意識が覚醒していく。昨日のあれは夢だったのだろうか。時計を見ると既に9時を過ぎもう時期短針が10をさそうとしていた。この時間では2限は間に合わないだろう。なんだか、気分が優れないし今日は学校を休むか。とりあえず、学校に連絡をしなければならぬ。ここから1番近い電話機は書齋だ。今日はこのまま、書齋に籠って読書をしてもいいな。書齋と僕の部屋は2つ部屋を挟んだ場所にあるので僕は書齋に向かうため廊下に出た。

廊下に出るとどうやら書齋から物音がする。しかしこの家は僕とおじさんの二人しか住んでいないし、今日はお手伝いさんは来ない日なので人がいるのはおかしい。泥棒でも入っているのだろうか。慎重に息を殺して書齋へと向かっていく。書齋の前につくと、襖を少しばかり開けて中の様子を覗き見る。そこには、昨日血まみれで出会った少女が楽しそうに本を読んでいる姿があった。

「やあやあ遅いおはようだね。若い頃からしつかりと早起きする習

慣は付けておくものだよ！」

なぜ彼女がこの家にいるのだろうか。そして彼女がいるのならなぜ僕は生きているのだろうか。目の前にいる存在に僕の思考は停止してしまった。

「おやおや、なぜ私がここにいいのか疑問に思っているのかね？ 答えは単純だよ。昨日の夜倒れた君を運んであげたのが私だからここにいるんだ。」

まさか、また彼女に生きたまま会えるとは思いつかなかった。あの状況から僕は殺されずに助けようとした相手に助けられるなんてことが果たしてあり得るのだろうか。

「なぜ昨日の夜僕を殺さなかったんだ？」

「殺すだなんて物騒なことを言わないでくれよ。昨日のはタダの罰ゲーム、所詮暇つぶしだよ。その証拠に君の左腕はまだ体に繋がったままだし、こうして私と言葉を交わしているじゃないか」

確かに左腕には手当をしてくれたのか包帯が巻かれている。彼女は一体何がしたいのだろうか。とても不気味に感じる。

「君が僕を殺すつもりがないのはわかったが、なぜ僕の家で本を読んでいるだ？ 僕の血を貰ったなら、僕の家じゃなくて君の家に帰ればいいじゃないか。」

「なぜ本を読んでいるって、そこに本があるからさ。・・・なんて言うのは嘘だよ。いや実は私は小説を書いていてね、もう時期完成するのだけれどオチがどうしても思い浮かばなくてね。ここの書齋にある本はどれも絶版だったり図書館にない代物ばかりだから、ここでヒントを貰おうかとおもってね。」

「喰種も本を読むのかい？」

「大抵の喰種は読み書きも出来ないよ。日常に紛れ込んで生活しているものは本を読めるかもしれないがね。」

驚いたな、喰種が本を読めることもそうだがまさか日常に喰種が潜んでいるとは。新たな知識を蓄えることができた。彼女との会話は何故だか楽しく感じる、できるのならば彼女とずっと話していたいと思えるほどに。

「別に本を読むのは勝手にしていいが、ちゃんと綺麗に片付けてくれよ。一応書齋はおじさんが大事にしてたんだ。」

「りよーかいりよーかい。それにしても君のおじさんは中々趣味がいいね。是非とも1度お話をしてみたいものだ。」

「おじさんは昨日亡くなったからもう会えないよ。」

「そうか、これは失礼なことを言ってしまったな。悪かったな少年。」

「別に謝らなくてもいいよ。おじさんもきつと誰かが本を読んでくれた方が嬉しいと思うよ。僕はこの書齋にある本は全部読んでしまったしね。」

「そう言つて貰えると助かるよ。まあしばらくここに住むことだし、1ヶ月くらいあれば読み終わるかな?」

彼女は今なんと言つたのだろうか。しばらくここに住む?・

「しばらくここに住むっていうのはどういうことだ?」

「読んで字のままだよ。しばらくこの近くに白鳩もいる事だろうし、家に帰るにも帰れない状況なんだ。まさかこんな可哀想な女の子を追い出そうだなんて思つてないだろうね?」

ちなみに、白鳩はCCGの捜査官のことね。追加で補足してくれたがそこはどうでもいいのだ。だが、こう言われてしまうと僕には選択肢がない。酷い脅迫である、一流の詐欺師にでも騙されている気分だ。

「わかった。この書齋にある本を読み終わるまではここに住んでもらつてかまわない。だけど、ここに居る間は問題を起こさないでくれよ。僕は平和主義なんだ、厄介事は勘弁だ。」

「ああ約束しよう。君がこの家に私を住まわせてくれる間は、問題を起こさないよね。」

「そうか。ならここに居る間はこの書齋を自由にしてもらつていいよ。隣の部屋に空きもあるから、寝たりするならそつちを使つてくれてかまわない。」

「色々悪いね。この借りはいつか返させてもらうよ。」

「ああ楽しみに待ってるよ。それと学校に電話だけしたいから少しだけ静かにして貰えると嬉しいんだけど。」

「学校とやらには、さつき連絡しておいたよ。君の生徒手帳に書いてあった電話番号にね。」

「電話って、僕が寝ている間に勝手に電話したのか？」

「感謝してもらいたいもんだ。君が8時を過ぎても目覚めないもんだから、学校に欠席の連絡をしてあげたのだからさ。」

「欠席の連絡って、どうして僕が学校を休むことが前提で話が進んでいるんだ。」

「おや、今から学校に行くのかね。君の性格の事だから、ここまで遅刻してまで学校に行くとは思えないが。」

「どうやら、昨日の夜の出来事だけで僕の性格は彼女に完璧に把握されているらしい。」

「まあその左腕じゃ勉強は難しいだろうし、今日はゆっくり休むといいよ。私は書齋に籠って読書に勤しむとしよう。君も一緒にどうだい少年。」

元々僕も読書をしようとしていた事だ。断る理由は見つからない。

「そうだな。その誘いに乗らせてもらうよ。えーっと・・・」

僕は彼女のことをなんと呼べばいいのだろうか。

少女か？彼女は見た目こそ小さいが知能は僕より上のようだし少女は似合わない。

ならば居候だろうか？僕と彼女の関係は居候などという関係にまとめられないだろうし・・・

「そういえば、自己紹介がまだだったね。私の名前はエト。・・・ただのエトだ。」

ただのエトとはどういう意味かわからないが、彼女の名前はエトというらしい。エトか、漢字で書くとするかどうかだろうか。だがエトという響きを僕は気に入った。きっと彼女の両親は彼女のことを愛していたのだろう。なぜだか僕はそう思った。

「そうか。ならエト今日からよろしく頼む。」

「ああよろしく頼むよ少年。」

こうして、僕とエトとの同居生活が幕を開けた。

第三話

エトとの生活が始まり1ヶ月が経過した。僕が学校に行っている間に彼女は書齋で本を読み、僕が帰ってくると僕の部屋で一緒にゲームをしたりした。夜になると彼女は何処かに出かけているようだが、僕が目覚ます時には彼女は家に戻ってきているようだ。休日の暇をしている時には彼女は色々僕と僕の知らないことを教えてくれた。彼女の名前が芳村愛支であることやこの世界の本当の仕組み、彼女たち喰種が隻眼の王を求めていることなどを。

こんななんてことも無い日常が心地よく感じた。まるでおじさんと過ごしていた時のように懐かしさすら覚えていた。だが、彼女との約束の期間ももうすぐ終わる。彼女は書齋にある本をもう少しで読み終えてしまう、きつと彼女ならば本の5冊くらい1日もあれば読み終わってしまうだろう。つまりは今日が彼女とお別れの日だ。今日は学校が休みのため、僕も彼女と書齋で本を読もうではないかと思いつき、書齋に足を運ぶ。

書齋に向かうと彼女は相も変わらず座布団を下に轆いて寝転がっていた。

「今日は随分と早く起きたんだね」

「まあ、たまには僕も早起きぐらいするよ」

「いつもなら潰れたカエルのように面白く寝ているのに珍しいな。それで、私のお別れが寂しいから会いに来てくれたのかな？」

「まあそんなところかな」

「おや、意外だな。少年がそんなに素直になるだなんて」

彼女は僕のことをなんだと思っているのだ。僕にだって別れを惜しむ感情くらいはある。ましてや彼女との別れなのだから。

「君と過ごしたこの1ヶ月は私も悪くなかったよ。きつと家族というものがあったならこんな感じなのだろうな。」

「君にだって家族はあるだろう？」

「・・・1つある物語を聞かせてあげよう。」

彼女は喰種の男と人間の女の恋話をしてくれた。女は男が所属し

ていた組織に近づくために男に接触してその際に二人の間に子供が出来たそう。人間と喰種の間には子供が出来るとして普通はありえないらしいが、彼らの間には子供が生まれたいらしい。しかし、世界は残酷である。男が所属していた組織が彼女の存在とその子供の存在に気づいてしまったのだ。男は子供だけは助けようと遠くへ逃がし、親子は離れ離れになってしまいその子供が世界に復讐を誓うというのが大まかな話だった。

「君はどう思う？副産物として生まれた子供に身勝手な親、この関係を家族と呼べると思うかい？」

なるほど。これはきつと彼女の話なのだろう。あの日見た片目だけが赫眼だったということもこの話を聞けば納得出来る。

家族とは難しい話だな。僕も幼き時から両親ではなくおじさんに育てられた。三者面談や運動会にだっておじさんが来てくれた。僕にとっておじさんは間違いなく家族だろう。だとしたら、僕を産んでくれた両親は家族ではないのだろうか。血の繋がりがあることだけが家族と言えるのだろうか。僕には分からない。だが一つだけ言えることはある。

「僕にも家族というものは分からない。けれども、きつと君の両親は君を愛していたと僕は思うよ。始まりこそは歪かもしれないし、彼らの気持ちは僕にはわからない。だが親は子を愛しているものだ。そうじゃなきゃ君に愛支なんて名前を付けていないだろうから。」

僕の言葉を聞くと彼女は鳩が豆鉄砲を食らったかのように驚いていた。僕だつて彼女は話してきた今までの話と今回の話を聞けばおおよその検討はつく。彼女が何故僕にこの話をしてくれたかはわからないが。しばらくすると彼女は短く咳払いをして言葉を発する。

「これは私の話ではない、誰かの話だ。・・・それに君の言っていることが正しかったと仮定しても、生まれてきた子は愛されなかったんだよ。あれは生まれてきてはいけない存在だったんだ。だれからも祝福されない異物にすぎない。」

そんなことは無い。そう反論したかったが、彼女の顔を見て言葉が止まる。彼女の顔はどこか諦めているようで寂しそうだつた。彼女

も心のどこかでわかっていたのだろう。けれども時は止まらない。物語は始まってしまったのだ、語り手が筆を置くまでこの物語は続いていくのだろう。終電がない電車のようにゴールを目指して果てしない線路をこれからも進まなければならぬ。これからもずっと彼女は苦しみ続ける。僕にはその物語を止める権利はない。ただ傍観し続けるしかない、そんな自分に吐き気をも覚える。

「少年、君は優しすぎるよ。きっと君はこれからも正しくいるのだろう。けれどね、正しさだけじゃ何も変えられないよ。何かを変えるには代償が必要だ。私は自分の人生を代償にこの世界を変えてみせる、これが私の生きる意味さ。だから全てが終わるまで見守ってはくれないかね?」

ああやつぱり世界は残酷だ。なぜ彼女がやらねばならないのだろう。彼女である必要性は無いはずだ。神様がいるとするならば、なぜ彼女にばかり試練を与えるのだろうか。彼女が成し遂げたい事はわかった。僕はこの物語の登場人物にはなれない。村人にすらなれないだろう。せめて彼女という物語を紡ぐことに専念しよう。きつとこれが僕の生きる意味なのだ、愛する彼女の人生を紡ぐ恋物語だ。

「ああ、僕は君が壊した世界をみたい。だから君の近くで見届けさせてくれ、約束だ。」

「ふふふ。契約成立だね。そうだ、この家から出ていく前に一つだけお願いをしてもいいかな?」

「お願い? まあ内容にもよるが聞かせてもらおうよ」

「時々この家に来てもいいだろうか? この書齋にいとなんだか気分がいいんだ。」

「それくらいなら別に構わないよ。いつでも来てくれていいよ。」

「・・・そうか、ありがとう少年。私はもうこの家を出ていく、まだまだやらなければならぬことは山盛りだからね。」

「そうか、君の夢が叶う事を祈っているよ」

「ありがとう。それと、君のおかげで完成した本は後日送らせてもらうよ。今度感想を聞きに来るからそれまでには読んでおいてくれると嬉しいな」

「ああ了解した」

「それじゃあ、お互い死んでなければまた会おう」

「ああまたな」

彼女は旅立つ。この家では彼女の抛り所にはなれない、彼女が飛ぶには狭すぎるのだ。自由を求めるためにはこの歪んだ鳥籠を壊さなければならぬ。僕の彼女に対するこの感情は胸の奥に留めておこう。この思いは伝えてはならない、この感情は彼女を鳥籠に捕らえてしまおう。彼女は僕が正しいと言ったが僕は間違えているだろう、そしてこれからも間違え続けるのだ。だって僕は彼女を愛しているから、彼女のためなら全てを捨ててしまおう。こんな歪んだ感情が正しいわけがない。

もう寝るとしよう。書齋に背を向け襖を閉める。彼女が居なくなった書齋は月の光が当たっていないからか、とても暗く虚しく見えた。そして居なくなったはずの彼女の匂いが未だに僕の鼻腔をくすぐる。

彼女が家を出てから数日後。tvではアオギリの樹という喰種組織の話が取り上げられていた。何年前から活動している喰種の集団らしいが最近になってより過激さを増したらしい。彼らも抗っているのだろう、この残酷な世界にエトを中心として。

それから少しして、今度は高槻泉という作家の話がtvで特集されていた。小夜時雨という小説が大ヒットして全国の書店で品切れが続出しているらしい。僕の手元にはその小夜時雨の筆者である高槻泉のサイン入り本が置いてある。そう、これはエトが書いた小説だ。まさかこんな有名人だったとは、書齋で寝転がっていたあの姿からは想像もつかなかった。

約束どおりに彼女が書いた小説を読み感想を用意していた。けれども、エトが僕の家を訪ねてくることは無かった。そしてそのまま僕は高校を卒業して大学生になった。特に夢もなかった僕は近所の平凡な大学に進学した。その間に、虹のモノクロ、なつにつき、ルサンチメンズと彼女の小説は発売されたがエトからの連絡は何事もなく、僕の部屋には本だけが虚しく積み重なっていった。

.....

そんな大学生活を過ごしていた時。突然彼女が僕の家を訪ねてきた。

あれから3年くらいたっただろうか。久々に見るエトはあの時からちつとも変わらなかつた。身長も見た目も。変わったのは僕だけだつた。彼女との身長差は20cmはできただろう。

「ご機嫌よう少年。いやこんなにも大きく成長したなら青年か。」へらへらした態度も変わらないようだ。懐かしい感覚だ、書斎での日々を思い出す。畳の匂いに窓から射す木漏れ日。彼女といふ間は僕もあの時に戻れたような感覚に陥る。

「久しぶりだな、本当に。お前が本を出す度に送ってくれるのは嬉しいが、感想を聞きにくると言つて用意してたのに随分な遅刻じゃないか。」

「まあまあ、男は女の遅刻をいつまでも待つものじゃないか。遅れてしまったのはすまないと思つている。色々と仕事が重なつてしまつてね。」

「それで一体何があつてこんな所に顔を出したんだ？小説は順調に売れているし君の組織も名を馳せているじゃないか。」

「いやね私の求めていたものが揃うかもしれないからさ、一応君にも報告しようかと思つて来たんだよ。それとこの前出した新刊の吊し人のマクガフィンを渡そうと思つてね。」

「そうか、遂に君の悲願がかなうときが来たのかもしれないな。友人としては心嬉しいばかりだ。小説はありがたく貰つておくよ。」

「うんうん。そういうえいば君は今朝のニュースを見たかい？」
「ニュースか、今朝は忙しくてtvは見えてないな。何かあつたのか？」

「臓器移植が患者の同意なしに行われて、その手術をした医者が大バッシングを受けたんだよ。巷じゃ大騒ぎさ。」

大学生ならニュースぐらい見なさいな。小言を呟かれるがレポートを徹夜で書いてから一限を受けて今まで寝ていたのだから仕方がないだろう。

「それで、そのニュースが一体どうしたって言うんだ？」

「もしも、その臓器が喰種のものだったら臓器移植を受けた側はどうなると思う？」

「そんなもの……」

そんなもの失敗するはずだ。人間どうしの移植でさえ高いリスクがあるのに、喰種の臓器を移植なんて。だがもしも、もしもそれが成功したとするなら……

「どうやら、その臓器提供を受けた少年は喰種になってしまったようだ。」

この時エトはまるで将来の夢を語る子供のように楽しそうに言葉を紡ぐが、その言葉を聞いた僕からすればその少年は不幸に思える。きっとその子はエトに遊ばれるのだ、そしてお気に召さなければ壊される。気に入れば隻眼の王にされるのだ。彼女が求めていた世界をぶっ壊すための象徴に。

僕と彼女の再開は物語の歯車が噛み合い動き出した時だった。